

年表で読む

10

南平の鯉漁

■ タラの産額と移出先

二シン漁は当然のようには第一位であるが、タラ漁はそれに次ぐような古平の重要な産物で、製品は塩鰯・乾鰯・開鰯・鰯の胃・鰯子・鰯粕などであった。明治三〇～四〇年代からは産物の多くは小樽港に集まり、古平からの移入・移出もほとんどが小樽港を経由していた。

明治四四年、古平町の鮭漁獲高は三三五石（二五一戸）、価格一、八一〇円とある。

— 狙われた鱈の田玉 —
乾鱈は京都周辺での家庭料理の外、伝統的な京料理の食材として重宝されたが、中国料理にも欠かせないものだった。その頃の清国には、苦力といわれる貧しい生活をしている労働者が

○ 鰐の胃	○ 開 鰐	○ 乾 鰐	○ 東京
神戸	伏木	青森	三、四七〇
直江津	一、三五〇	一、三五七	三、四七一
二〇〇	園	二七〇	二七〇
○ 横浜	敦賀	伏木	横浜
東京	大阪	一、二三	一、二三
○ 横浜	三三	二七	二七

いたが、彼等はなぜか、鰐の目玉が不思議なちからを持つていることを経験から知っていた。それで港から乾鰐や明太の荷を運ぶ時には、監視のなかでも争うようにして目玉を抜き取っていたという。

※ 柳（ます）一柳には六〇尾入り、沖合いで獲れる沖タラは平均して一尾五・六キロ、岸近くで獲れる磯タラは一・五から一・八キロだった。

■大正年間の漁獲量(ト)
※ 肝油の単位・石(ミ)は、
一石(約一八〇リットル)

大正元年のタラ釣りは大型川崎船八隻、中型七隻が出漁して
いて、小樽港からの移出入には見られなかつたが古平ではタラ
の肝油が製造されていた。

き取つて乾燥したもの)と開鑿(背割りにして、頭と中骨を取つたもの)を製造した。棒鱈は一貫五〇〇匁(約九・四キ)を一束(そく)とし、八束で一樁(うら)とした。

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 42-12590
第176号・平成16年5月1日

○ 鰐 青森 大阪 名古屋
柏 五毛 畏 境
敦賀 青森

大正二年

一月一日

亥之吉さんの子供の葬式に妻と幸治が行く。今日も吹雪で漁船は休む。リンゴ四、五円売れる。夜、支店で和合会の総会があり行く。

朝の内晴天だつたが午後からまた雪だ。店は入船町の寺田か

アバ繩もポツポツ出る。今日は帳祝いで(※商店では毎年正月四日か一一日に、その年に使う帳簿を新しく作り、それを祝い

商売繁盛を願う習慣がある
夜酒肴の馳走がある。子供等四
人が本へお祝ハの馳走こ乎ば

れ喜んで行つた

れ喜んで行つた。

和合会のことについて六時から
困支店に集まる。③、④、平田、山
下、⑤そのほかでいろいろ協議
する。今日までの貸し出しには
ずいぶん不安なものがあるの
で、大いに改革せねばならぬと
決議し、一時帰る。

昨夜から今晩にかけて近年稀

な程の寒さ。朝の温度計は二五度F(マイナス五・六度C)まで下がつている。店は刺繡季節であちこちからずいぶん通帳などでの注文がある。毎日千間から千五百間は出る。東洋へ一万間、山本へ五千間注文してある網の出荷案内がまだ来ないので困っている。仕方なく田へ電話で三千間注文した。夜平田さん宅で和合会の役員会を開き協議する。

高野名幸作さんとの日記から

[77]

当時の世相を見る

て、今日は休みだと知らせてくれたとのこと。実に一寸先も見えぬような大吹雪になり、板戸も閉めた。新聞も郵便も止まつて来ない。

▼一月一七日

昨日に続いて今日も吹雪、そして雪も積もる。今年のような大雪も珍しい。店のこたつに入つて帳簿整理をする。

いに行き七時頃帰る。私は店番、
刺綱の客が来る。夜 中村床屋で
散髪をする。

▼一月二〇日

今日も朝から雪が降る。しかし風はなく静かだ。才太郎さんが雪下ろしの手伝いに来てくれる。茶の間、座敷の雪下ろしは終わったが、午後から今年二回目の雪引きをする。カレ網が出たが戻つたという。満足にナギの日はない、よく荒れる年だ。

▼一月一九日

チラチラ雪が降る。今年は雪の始末に出来を頼んだが相当なものだ。羽生馬車屋ほか五人で雪下ろしや雪引きをやる。畠の

今日は快晴、カレ網などは皆出た。相変わらず雪引きをやる。カレ網は漁があつたというので元気がよい。タラ漁は不漁だ。夜田の四十二の祝いに招待され、小林、大〇、〇、中一らと行く。六時頃から始まる。大いに飲み食い歌う、芸者が三人来て賑やかだ。後 小林、大〇、〇と美登利の二次会に行き一二時過ぎに帰る。

▼一月二日

きも正午で中止した。私は昨夜の田の疲れで一日中休む。古英丸で小樽田出荷の綿網外五個の荷物が着いた。

▼一月二二日

起床八時、この頃は朝夕が少しずつ日が長くなつた。今日も馬そりと出面四人で雪引きをやる。ずいぶん大雪だ。一昨日田の馳走で昨日一日中疲れて休んだが、今日はすつきりして良くなつた。店は刺網の客で忙しい。だんだん季節になつて来たのだ。小樽田の小林店員が来たので昼食を出す。

▼一月二六日

朝七時頃からにわかに大雪となる。学校も一年生などは帰れないで、迎えに行く人も沢山いる。トミは越中屋の姉に連れられて帰つて来た。吉治は寒い寒いと泣きながら帰つて来た。カゼが心配なので七時に休む。今夜本の嫁入りがあるという。

▼一月一七日

今日は快晴。雪引きは馬そりはやめて、四人が手そりで引く。困との中央通りに面したところを取つたらきれいになり、道路も広々となつた。小樽から下山口と、久の出張員が来る。久の店員が茶の間に上りいろいろ話をしたが、昨年までの出張員西村君が一月に死去されたこと、気の毒なことだ。夕食を出し、七時頃帰る。

▼一月一四日

起床八時、雪引きも昨日で終わりだ。店はいよいよ刺網時期

に入り相当に忙しい。海は上ナギ、一時頃からヒマになつたのは四時頃、幾分良くなつたようをする。風がないのでうまく揚がらぬ。リンゴの客があり、五円程売る。

▼一月二六日

朝七時頃からにわかに大雪となる。学校も一年生などは帰れないで、迎えに行く人も沢山いる。トミは越中屋の姉に連れられて帰つて来た。吉治は寒い寒いと泣きながら帰つて来た。カゼが心配なので七時に休む。今夜本の嫁入りがあるという。

朝七時頃からにわかに大雪となる。学校も一年生などは帰れないで、迎えに行く人も沢山いる。トミは越中屋の姉に連れられて帰つて来た。吉治は寒い寒いと泣きながら帰つて来た。カゼが心配なので七時に休む。今夜本の嫁入りがあるという。

▼一月一七日

朝のうちは沖からの風が強く寒さも厳しい。寒暖計は二十四度F(マイナス四・四度C)、こたつに入つても耳や顔が痛いような感じだ。熊さんは新地方への出かけ通帳を集めて来る。かれもこの頃は相当の漁があるとのことなので、今月末には六、七〇〇円は集金できるだろう。

昨夜一二時頃から吹雪が甚だしく、板戸を打つ音が激しかつたが、朝一〇時頃からようやく静かになつた。今日は寒明け、これからは日増しに暖くなるののことだ。老いても丈夫で元気なものだ。私も昨日から起きているが追々良くなつてきた。○松尾の

去る三〇日以来、体の調子が悪くずっと休んでいたが、今日は四時頃、幾分良くなつたようなので起床す。これまで一日も休めば長い方であつたが、五日余りも休んだのは珍しいことだ。今日も風が寒いので、首巻きをして店のこたつに入つていい。リンゴは毎日三、四円ぐら

いすつ売れる。○松尾の嫁さん、去る三日札幌にて安産。その後経過も良かつたというのに四、五日前から不快にて死亡せりとのこと。実際に氣の毒なことだ。この夜小樽方面に火の手があがつたので、困で電話で問い合わせたところ、市立小樽商業学校が焼失せしとの由。火事は春が来たようで気も晴れ晴れした。午後一時頃から天候がにわかに変わつて、吹雪が激しくなつた。カレ網などは如何かと案じていたら、皆無事に戻つたとのことだ。店もボチボチ忙しくなつてきた。○の葬式に熊さんが手伝いに行く。父は葬式を送りに行く。私の風邪の方も今日ようやく快復したような気分になる。一月から三月二〇日頃までは、店の一番のかき入れ時だ。これから大いに活動せねばならぬ。一昨日の小樽厅商の火事、損害は約三〇万円とのこと、恐ろしい。伏見宮殿下が去る三日、脳溢血で薨去され國葬とのこと。行年六十五歳。日露戦争の勇将黒木大將(八〇歳)も死去される。

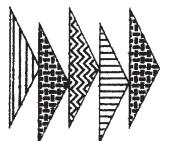
▼一月五日

朝の内は一天雲なき青空で、春が来たようで気も晴れ晴れした。午後一時頃から天候がにわかに変わつて、吹雪が激しくなつた。カレ網などは如何かと案じていたら、皆無事に戻つたと

のことだ。店もボチボチ忙しくなつてきた。○の葬式に熊さんが手伝いに行く。父は葬式を送りに行く。私の風邪の方も今日ようやく快復したような気分になる。一月から三月二〇日頃までは、店の一番のかき入れ時だ。これから大いに活動せねばならぬ。一昨日の小樽厅商の火事、損害は約三〇万円とのこと、恐ろしい。伏見宮殿下が去る三日、脳溢血で薨去され國葬とのこと。行年六十五歳。日露戦争の勇将黒

初夏の投資

大澤文子



「いいなア 夏はここまで来
ている！」

貼りつけたくなるような青一
色の空……飽くともなく見上
げれば、はや旅ごころが沸くの
は誰しも当たり前のことであろ
う。

僅かに残る丘のなだりには夏
を待つがに笛鳴りの音がする。

そんなとき、「石勝線に乗つ
てみたいなアー」

ふと、編集長中村勝栄氏のもら
したひと言。

それぞれが夢中になつて『海
鳴』誌の編集に頭をつかいペン
をもち、仕事をしていった最中の
こと。

「ウワア！」

編集長の声を聞きもらすものは
いない。一同、即座に双手をあ
げ賛成！ だが若い一編集員が
まぜつかえす。「編集長も肝つ玉
石勝線なんて言わないのでいつそ
のこと海を渡つていかない？」

私は無遠慮に心の中の眼を見
せたのかたに「私は無遠慮に心
の中の眼を見

苦笑する編集長。

それからが大変、一行八名、

晴天とは言えないが僅か陽の射
す一週間後。小学生の遠足よろ
しく、ふくらんだバッグを肩に

手に……小さな旅にでた。

特急列車の座席のむきを廻し
四座席二場所を獲得。果てしな
く広がる石勝高原の高空を悠々
と弧をえがき舞う一羽の鳥、遙
か連なる狩勝岳。

まぶしいくらい輝く日のもど

にはや雑草の緑の萌え。沿線近
くの田んぼに何をついばむか雀
子の群れ、感嘆の声をあげデッ
サンするもの。

自由な心に解放されたひととき
の喜び。

見知らぬ駅に降り、見知らぬ

町を心のままに歩く。古い町で

はあろうがそれぞれの生活があ
り、風土があちこちに残つてい

る。

私は無遠慮に心の中の眼を見

開き、頭脳の中のシャツターを切る。カメラで捕らえることのできない風の流れ、その土地どちの人の方言、初夏の印象がみずみずしく心の中に記されるのだつた。

何年か前、ある若者達の番組で、「百万円もあつたらあなたはどうしますか？」という質問にいろいろな答えがでてきたが、ある一人の若者が「旅に出て見聞を広めます」と言つた。

私は同感！ と声をあげた。

名答であると思った。広く柔軟な精神に蓄えられた情的財産こ

そ、ながい人生において何もの

にも替えがたき「富」というに

ふさわしいものであろう。

新得の駅前の「火夫の像」の

前で、押しくらまんじゅうよろ

しく記念撮影、列車の中でそれ

ぞが持ち寄つたおやつを食べ

すぎ、昼食は簡単に……とい

うことで『じる紋所』と看板を掲げ

た蕎麦屋の暖簾をくぐる。

夕近く、遠く雲海が表情も豊

かにゆつたりと幾筋もの髪を見

せはじめた。

「初夏の投資」……ささやかと

は言いながら、晴れあがつた

初夏の空のもとに、心を洗われ

たことは最大の投資であつたろ

う。しばらくは家庭でも……仕

事の面でも寛容な日々がつづく

であろう。

いつの日かまた、小銭を整理

して今度は「初冬の投資」とい

きたいもの。

編集長中村勝栄氏と編集員一

同が約した一日だつた。

中戦

泣き笑いの

後戦

種大漁場体験記

吉野慶一郎

ソ連将校から一瞬、全員感謝の言葉に緊張が走つたが、近づいてきたソ連軍の将校たちは、皆笑顔を向けながら次々と握手をし、そして中にいた通訳が、

「今日は素晴らしい音楽会を開いて、大勢の人たちに楽しみを与えてくれたことに感謝します。あなた方の技量もプロと同じくらい上手です。そこでお願ひがある。この後も時々このようないがる。度の日曜日にぜひやつてほしい。ソ連の兵士も楽しみにして待っています」

と、いうことでした。

演芸会で、何か不都合なことをさせ、とがめられるのかと思つていたところ、これはどんだ

思ひ過ごしで、意外にも感謝の言葉にまずは安堵したものの、

思ひぬ音楽会開催の依頼を受けて、逆に一同目を白黒させる程

再開は無理と音楽会を断るソ連軍から

樂会開催の要望をかなえてやりたいところでしたが、とにかく

今回に全力を挙げ、また再度どうぞ我々の事情もご了承願います』

そこで急ぎ協議をした結果、やはり近々中には無理だということ

で、文書で丁重にこのことをソ連側に伝えたのです。

『今回は私たちの拙い演芸会でしたが、大変お褒めをいただきました上に、この後も開催する

ようにとのご親切なお勧めに深く感謝いたします。考えてみますと、今この町の人たちはラジオも聴けず、映画も見れずに淋しく暗い思いであります。何か元気を出して欲しいと、我々若者が考えてようやく実現した素人演芸会です。いろいろの障害や困難を乗り越えて練習を続け、準備をしてようやく今回公演した次第です。

現在の状況では、時間的にも経済的にもその余裕がありません。誠に残念ですが、再開はお断りするより外はありません。

どうぞ我々の事情もご了承願います』

すると、将校の顔が少し曇つてきましたようだ。

「それは大変残念なことだ。それならこちらにも考えがある。今回の出演者の氏名を知りたい」

と言われたので、出演者の名簿を提出しました。

それを受け取つて将校は、「先日、何か力になれるよう考

えてみると約束したので、必要なものを持って来た。皆の身分証明書と少しだが食糧も置いて

いく。ぜひ音楽会を開いてほしい」そう言うと、さっさと帰つてしまつたのです。

「こっちにも考え方がある」と言つて、いたが、これはどうゆうことなのか? いつたい何を考えているのだろうか? なーんかせつかくの演芸会成功の喜びも不吉な予感が脳裏をかすめる。

「裁判で刑務所送りか……?」などと、ひそひそ話をしているところへ一台のジープが来て、出迎えると先日の将校でした。「コンニチワ!」将校は大きな声で日本語で挨拶をしながら、満面笑みを浮かべて入つて来たのには一同びっくりしました。

「二日後に責任者の家に行くから、待つて待つてるように……」

福寿草

吉川義雄

わが家の前に、日暮れ方の残雪をガリ、ガリ鳴らして大型のパンが止まつた。

近所に住むご夫婦が、大きなビニール袋から、

「喜んで下さると思って……」

と、どっさり土のついた福寿草を差し出した。十数個の可憐な花が咲いていて、根だけが不相応に長く多かつた。

古平には有るのか無いのか、子供の頃から知つてはいたが、見た記憶は全く無く、知つているのは、写真や本によつて、おもでたい花とされて承知しているから、本物と初対面しても珍しさはない。

本来この花は、多年草として山に咲くものだそうだが、この可愛らしさと、雪を割つても、早春の陽光に咲く逞しさを、人は見過ごすはずはない。実は三年前にも、一度だけ实物

と遭遇したことがあつた。ここに引つ越す直前で、周囲の古い家屋がどんどん壊され、二十年近くも住んでいたのに見ることもなかつた。隣家との間に、残

雪を搔き分けてこの花が咲いていたのだ。

驚くのが先で、初めは何の花か分からぬいで近づき、福寿草だと分かつて狂喜した。

口クに光りも差さぬ家と家との間に、何時から生き続けてきたものか、初対面のうれしさに私の方が大失敗をしてしまつた。

普通の花を扱うように、根本を浅く掘つてしまつたのだ。今隨分、春先を楽しませてもらつたろうにと、時々想い出しては

後志方面への旅行というが、どのあたりの道端で咲いていたものやら、車中から見つけて懸命に掘つて下さつた時間と労力と、ご好意に心から感謝、感謝であった。

いじらしい程、懸命に咲く花であることよ。夕方、寒くなれば花を閉じ、陽が差して暖氣だと精一杯花を開いて、透きとおるような、水々しい黄色の輝きを忘れない。

他人様の絵や写真を通じて、色紙に、私も何回か知つたかぶりの絵を描いてはいた。自分で飾つて置くにはゆるせるが、その全部をひと様に差しあげていたのだ。似て非なるものを、平気で描いていた不遜さを思い知らされたりもした。

翌日、半日をかけて妻が福寿草を植えつけた。もう少し経つと、先住の大家さんが植えたス

た福寿草は、ご夫妻が充分生態を承知の上で掘つたらしく、三十センチ以上もある細い根を少しも損なうことなく、住んでいた周りの土も充分過ぎる程付いていた。

妻が整理したあとに落ちていた、うつかりゴミにしてしまうような一枚を私が見つけて、家中で三十年も傲慢なくらしをしている、カネノナルキの大鉢の中に植えた。

南側の、四六時中ストーブの焚かれている部屋。弱々しく、すぐ花が咲き初めて、目ざとく娘に見つけられてしまつた。コトの成り行きが分からなくとも、悪いものは悪いらしく、「こんなあつたかい所に置くなんて可哀想よ」と叱られた。

生きてゆくのに戦いを忘れ、目標を見失つたら、死への漂流だけになつてしまふ。

過去と言つても、未来と言つても、一瞬の現在にしか無いだけになつてしまふ。過去と言つても、一瞬の現在にしか無いと、現実の尊さを先哲は教えて福寿草の生きさまは、希望の姿と、歡喜の美しさを教えてくれているようである。

連作 古平ます

<7>

176号

（五） 訪町（1）

私が初めて古平を訪れたのは昭和二十四年五月、大火の五日後だった。早いものだ。もう半世紀以上も経つ。以来、好むと好まざるとに関わらず、現在に繋がる宿縁がこの町との間に生じようとは夢にも思わなかつた。

昨今のように各家庭にまで電話はまだ普及しておらず、何かつけ情報が行き渡るには時間がかかる時代だった。食料、衣服も無論豊富ではない。本州東北の生家で、ひとしきり春の休暇を過ごしていた私が古平大火のニュースを知ったのは、十二キロ離れた大曲町（現市）在の友人によってであった。生家のは主に新地、丸山方面で、彼女の実家のある方は焼けなかつた。

列車から降りた余市駅には、まだ小娘の現在の妻が迎えていた。話を訊くと焼けた跡を残していた。道とも見えぬ

火で焼けたらしい。俺は知り合いの家があるから行つて見るが、お前も一緒にどうだ〇〇ちゃんの家もどうなつたか知れないぞ。と暗に後年妻となつたその女の名を口にし、せき立てた。

生家では新聞をとつていたが、誌面を丹念に読む程私はダメな質ではない。何しろ夜ともなれば誘いに来る悪童連とぶろくを酌み交わし、オダを上げるに忙しかつたからである。私が行つたからとてどうなるものでもないが、とも角一つ返事で両親にも断らず友人に同行を約した。

到着した翌日見た焼け野原は、以前住んだことのある東京空襲の廃墟を再現したかのようであった。丸山がすぐ左にやたらと近く中空をかち割り、焼け残つた石倉が生々しく火災の爪跡を残していた。道とも見えぬ

途に、高さ四十五メートルの蠟燭岩は、思わず口を空けぽかんと仰ぎ見るに充分だつた。

時に自然是とんでもない悪戯をするものだ。人知を超えた造形の奇態さはほとんど人の意表をつく。はからずも偶然訪問したこの北帰行によつて、私はおだやかに開けた生地の自然とは、百八十度異なる積丹半島の男性的ともいえる荒々しい風景と、そこに生きる人々の厳しい生き様を目の当たりにする事態となる。

声で、誰かこれ持つて行つて保管しておいて、と手早く荷造つた着物類を盾に、住所を告げて去つて行つた。それを家へ持ち帰り、翌日訪ねて来た持ち主に手渡したのがせめてもの人助けになつたのかも、と彼女は目元をゆるめた。

彼女の実家一階の一室に一緒に滞在していた大曲在の友人は、三日後、知人宅も焼けなかつたと言つて一足先に帰つて行つた。私は一人遅れて帰ることに決めた。彼女の実家の馬鈴薯

古平いろはうた

2

鮫待つ 句碑を残して悠々子

◆故郷の俳人・句碑建立

故郷の海に親しみ、海に魅せられ、戦前からその独特的な作風で広く知られる水見悠々子の没後、かつて教えを受けた句会の会員や友人、知人らが図って生地に句碑が建立された。

丘側は、樹林に覆われた小高い丘になつていて、それが一帯の奥の山地へと続き、傍には水田を潤し、リンゴ園を抜けてチヨペタン川の清流が流れている。

浜ではまだ雪深い二月も末に

なると、早くも鮫の神様と異名をとるヤン衆が入り込み、町中が次第に活気を帯びてくる。

七月七日除幕式が行われ、閑静な疎林の中に、雅趣のある句碑と庭石が重厚な配置を見せていく。句碑には、悠々子が日頃から愛吟の一句、

せりふ

鶯や昔本陣今番屋 悠々子

筆太の味わいのある文字が、深い陰影をもつて刻されている。

◆句の生まれた背景

昔、本陣と言わられた建物の

界を思われる風景であった。人の往来のはげしかつた本陣となり、鮫の群れによって番屋の繁栄が続いた。

しかし、その後鮫の去つた

浜辺には、大きな番屋だけが目立つようになつてゐるが、もうそこにはかつての賑いは見られない。鮫漁の栄枯盛衰を見守り続けてきた番屋だけが静かに建つていて、大漁に沸いた浜の風景は昔語りとなつてしまつた。

しかし春がめぐつて来ると、あちこちの谷間からは鶯の声が昔と変わらず聞こえてくる。

◆活気ある文芸活動

古平町も、以前は沿岸地域の多くがそうであつたように、地形の悪条件から陸の孤島に甘んじていたが、鮫漁を中心とする漁業の恩恵から地域の経済も安定し、交流の少ない状況の中にもそれぞれの文化的な活動が胎動していた。

大正の中頃から、青年を中心とした文芸活動が盛んになり、

詩や短歌、俳句、評論などの総

詩書きを手伝い、終わつてからにしようと思つたからである。

三段論法で言えば、古平

町を訪れ、後年、妻との結婚が現実になつたとのいきさつにもなる。本州と北海道に離れていても、気持ちさえ一途であればいつか結ばれるものは結ばれる。運命というか、世の中の縁というやつはどこでどのように繋がり、絡み合い人間を呪縛するのか、一向に見当がつかぬもの

のようである。(続く)

【せたかむい】でご紹介してきました、古平俳句会・

古平町岬短歌会会員の方々の作品を小冊子にいたしました。ご希望の方には差し上げますので、古平町史編纂室へご連絡ください。

▽ 句集△
春△
▽ 歌集△

合的な文芸誌を発行していく、若き日の吉田一穂も学友に請われて詩を送っていた。

昭和に入ると俳句が盛んになりました、浜町と新地町方面にそれぞれ句会が開かれていた。特に指導者がいなかつたが俳誌などを取り寄せ、競うようにして小樽新聞や北海タイムスの俳句欄に投句していた。

◆高まる俳句熱

その頃、府立函館工業学校建築科に在学していて校内、誌に詩や戯曲などを発表し、自身で文芸誌まで発行していた町出身の水見喜多利（悠々子）が卒業し、家業の建設業を継ぐため帰郷した。

在学中から俳句に傾注し、

服部畠石の主宰する『高潮』に投句していたが（後に同人となる）、その後、ホトトギスに投句をし初入選をする。

虎杖のひろごり咲ける海辺かな

昭和の初め古平にも、当時、名の知られた俳人が訪れるようになり、町内にも句碑のあるホトトギス同人・野村泊月も

◆高まる俳句熱
その頃、府立函館工業学校建築科に在学していて校内、誌に詩や戯曲などを発表し、自身で文芸誌まで発行していた町出身の水見喜多利（悠々子）が卒業し、家業の建設業を継ぐため帰郷した。
在学中から俳句に傾注し、
◆俳句指導の先駆者
◆俳句指導の先駆者
来遊し、近隣を吟行しながら俳句愛好者の指導をした。

◆俳句指導の先駆者
帰郷してからの悠々子は古平町役場に勤務しながら、町内の俳句の指導者としてその啓蒙

と普及を自ら実践した。

戦時中、戦線にあつて句集『盧山』を上梓し、ホトトギス同人にも推挙されたが、後継者ともなる小・中学生の俳句指導にも熱心であった。



文化会館入口の近く、道路沿いに立つ
水見悠々子句碑（古平町文化財に指定）
↓句碑に刻された自筆の句

今春庵

シニコ

地元や知る人の間では、その長いひげから「ヒゲさん」の愛称で親しまれ、長年にわたって研鑽の俳句では魚を題材にした作句に特色があり『魚の俳人』としての異名ももつ。すでに全国的にも名は知られ、中公文庫『百魚歳時記』（本鮓）に次の句が掲載されている。

◆句碑と共に残る偉業
俳句の指導に努めるかたわらにも刻苦し、句集『鰐百話』や『雪』、父子句集『海幸山幸』を上梓した。古平町開町百年記念には高浜年尾を迎え、全道ホトトギス大会を古平町で開催している。

北海道建築功労者として、また、悠々子の句碑と連絡協議会会長に推薦され、郷土史家としてもテレビ放送の出演や雑誌などにも執筆し、後年は精力的に古平町史の編集に当たったが、昭和五八年三月、惜しまれながら心不全にて死去した。行年七四歳

予科練？の入隊

年配者ばかりの初年兵が召集で入隊してきた。権太出身者で職業も雑多である。私の班に入ってきた石山文吉は警察官、松尾萬吉は満州浪人までや

つた土建屋、石垣は皮のなめし屋、加藤は郵便局員、細谷和夫は洋服の仕立屋、名前は思い出せないが、この目立て上手な木挽き屋もいた。みんな年配者ばかりの集まりだつたが、彼等のことを

『予科練』と呼んだ。

実際の『予科練』というのは「若い血潮の予科練の……」という、当時大流行した歌の文句にあるように、若いピチピチした若者だつたが、今度入隊してきたのはオッサン達ばかりなので、誰かがふざけて予科練とあだ名をつけたらしい。

だが、世の中の荒波にもまれて、しかも何らかの技術を身につけている人達なので、動作は

機敏とは言えないがいろいろな仕事が出来るので、私達の作業

隊としては即戦力として役立つ人達であった。

で入隊してきた。権太出身者で職業も雑多である。私の班に入

つきた石山文吉は警察官、松尾萬吉は満州浪人までや

鮫の豊漁

この頃、

権太の沿岸では鮫が連日のように群衆で、鮫を持て余す程の豊漁であった。

それで、私達の連隊にも大量の鮫が入つて来て、毎日の

副食が鮫の煮物であつた。それでも食べ切れないので、今までの

『状況始め』のラッパを吹くと、後は用事がない。

※ 予科練 II 海軍飛行予科練習生の略称。旧日本海軍で戦争における航空機の重要性から、多数の搭乗員を養成するため一九三〇年、霞ヶ浦飛行場内に設けられた制度で、一四〇—一五歳の少年に三二か年の基礎教育をした。第一次世界大戦中は多くの少年が予科練として入隊し、若くして犠牲もまた多かつた。

るして干し、最後は身欠きに仕上げて兵舎の薪ストーブで焼いて食べたが、油のこつり乗つた身欠きはまた格別な味がした

ような気がする。

夜間演習

秋も深まつた頃、連隊を挙げての夜間演習が実施された。その時、私に連隊本部からラッパ手として来るよう指名があつた。並みいる先輩のラッパ手を飛び越えて私が指名されると

は、新米のラッパ手として面白

新たなるものがあつた。

連隊長のところへ行き、夜間に演習が始まるとただ連隊長の後ろについて歩くだけ。最初に、

磨くだけでオーケーだ。ラッパ手を志願して一生懸命努力した結果か、とも思つてゐる。

『状況終わり』

も、私の仕事は連隊長のお供を

して歩くだけである。

長い長い夜が明けて、

のラッパを吹いて私の任務は終わつた。私は、連隊本部のラッパ手を指名されたためにたまたま楽をしたが、中隊にいれば、ラッパか擲弾筒かのどちらかをやらせられて、皆と同じように泥まみれになつていただろう。

外の兵隊達は兵舎に帰つてからも大変だ。兵器の手入れ、軍服の洗濯などなどで大忙しどころで、私はラッパをピッカピカに磨くだけでオーケーだ。ラッパ手を志願して一生懸命努力した結果か、とも思つてゐる。私はラッパをピッカピカに磨くだけでオーケーだ。ラッパ手を志願して一生懸命努力した結果か、とも思つてゐる。

老兵の綴り方

あゝ権太國境守備隊

18

橋

義 春

度は各中隊へ生鮫が馬車でどう運ばれた来た。
各班毎に三角兵舎の板壁に、まるで漁師がやるように鮫を吊



古平町岬短歌会



古平俳句会

春の海荒れて岩場に打ち上がる波の花とぶ生きもののごと
鱸不漁にて修学旅行無しと決まりき子供心にくやしかりにき

池田テル

咪壽なほ短歌に向ふ姉のそば杖となりつつわれも一首を
注射の痕むらさき色の細腕を擦りやりつつ春はもうすぐ

寺内りょう

雪のこる庭に盛り咲くサフランの黄きは春色朝日に耀よふ

鈴木時子

雪消えしパークゴルフ場早朝より打ち廻する見ゆ老いも若きも

竹内コト

やうやくに春網建てて大漁を祈りて今朝も御神酒供へぬ

田中香苗

雪解けの土手沿ひに萌ゆ蘿のとう思はずかぞふひいふうみいと

丹後初江

猫柳芽吹く川岸春の水白く濁りて瀬をはやみゆく

東知美

寄る波の音リズム良く磯の辺はあたかも電車の通るに似たり

堀典子

お詫びして訂正いたします

正米寿超へなほ年迎ふ樂しみに孫の佳き日を数へるなり 池田テル
米寿へなほ年迎ふ樂しみに孫の佳き日を数へるなり 池田テル

早春の背山とび立つ鳶の笛 齋藤波留
ひなの菓子百円ショップも混じりをり 山口悦子

ほしだらの潮の香も風の中 越野敏雄

屋根の雪老に手の出すすべもなく 大和田絵伊
福井幸平

雪しんしん闇の明るさ見えにけり

高橋重子

流水のぶつかる波に風音す

連なれる山に緑のほつほつと 仲谷比呂吉

初鮎匂ひただよふ路地のろじ 室谷弘子

倉庫の重さうにせし雪降す 泉清三

暗闇を引き裂くひかり冬の雷 外山俊久

棒鰐や吹きさらされし軒の下 渡辺嘉之

園児らの撒かれる如に春の坂 堀典子
東風兆す沖の荒るるを疑はず 越野清治

古平町史年表

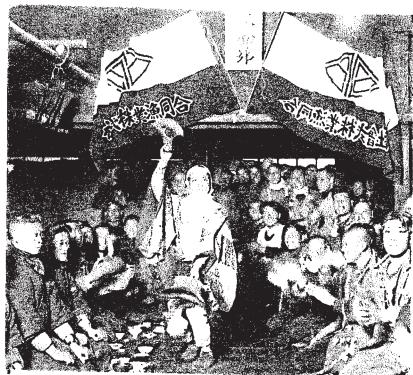
昭和6年(1931) ~ 続き

- △ 余市の小原・甲谷両回漕店が共同で、余市・古平・美国間を瑞広丸と外浜丸で1日3往復の定期航路の運航を始める(料金は余市~古平間70銭・自動車1円70銭)
- △ 厚苦岬沖で発動機船1隻が座礁、1人が行方不明となる
- △ 暴風のためスケソウ漁の発動機船1隻が大破し乗組員7人が溺死する。20隻余りの船は小樽港に避難する
- △ 夕方、新開町から出火し、2棟3戸を焼失する
- △ 鯨合同漁業株式会社が設立される。町内の株主28人、14,864株(全体の6.5%)

昭和7年(1932)

- △ 作地へ政府救済米として安価で(市価の約2/3)払い下げをするという通知が入る
(先号での昭和6年の記述は誤りですので削除)
- △ 浜町の大工館岡重助が、沖村の山中で熊3頭を射止める
- △ 浜町の有志による本陣の浜へ船着場を築設することについて、町長も出席し協議する
- △ 町政に対する批判や主張をする、古平同志クラブの結成式が浜町西説教所で行われ、衆議院選候補に道議の民政党・山本厚三の推薦を決める
- △ 政府払下げ米が1俵(60キロ)6円40銭で売り出される
(市価は9円90銭)
- △ 鯨合同漁業(株)が設立され、古平事業所が古平町内に9か統の鯨建場をたてる
- △ 余市・古平間に、種田自動車会社が初めて貨物自動車を運行する。(これまで入舸まで運行していた)
- △ 部落会ごとに飛行機献納資金として寄附を集める
- △ 古平・余市間の郵便物託送に、夏期間は貨物自動車が利用される
- △ 琴平神社境内の忠魂碑鳥居を、在郷軍人会古平分会が勤労奉仕で建立する
- △ 浜町大火記念日に当たり(大正8年5月7日)、恵比須神社で鎮火祭が行われる

→ 鯨合同漁業株主名簿
の網下ろし事業祝賀第4回景番屋
↑ 同漁業株式会社



↑ 本陣の浜に揚げられ漁船



↑ 現在地に移築された忠魂碑